

(注五) 注三 参照

(注六) 山崎正和『鷗外開う家長』二百三十六頁

(注七)(注八) 注三 参照

(注九) 注六 参照

(注十) 注三 参照

(注十一) 注六 参照

(注十二) (注十五) 藤原正義「『祇王』の方法」(『北九州大学文学部紀要』七

号、昭和四十六年十二月)

(注十六)(注十七) 注四 参照

(注十八) 注三 参照

猶お・南都本・源平盛衰記・延慶本とも本文は影印本(古典研究會叢書本)によ
って統一した。

接的に描いたものである。南都本では、「祇」という漢字と「ヨシ」という読みとが矛盾している。このことは、南都本の「祇王祇女事」が視覚よりも、聴覚に多くかわかることを意味するのではないかと思うのであるが、いかがであろうか。

Ⅱ (e) (1)は祇王が仏に「我古ノ上」を見た背景——祇王の体験を語る条である。「我身ノ上」という表現のある南都本の方が、祇王の仏への一体感をよりの確にあらわしている。

(e) (2)では「佐渡判官」「安部資成」とそれぞれ異なる点が目される。

南都本と源平盛衰記は屈折してつながっているであろう。

(j) (2)から(u)に及ぶところは、清盛が仏に夢中になって、祇王に退邸を命じる条である。仏に対する愛が祇王に退邸を命じるのであるが、源平盛衰記が仏の「祇王には、かる」態度を直接の契機としているのに対し、南都本では純粹に清盛の感情の動きに帰せられているのである。退邸を命じられた祇王が「先世ノ宿執」という諦観に至ったことは源平盛衰記にはない。「先世ノ宿執」とみたことが、「後世菩提ノイトナミ」に走ることの伏線になっているとすれば、南都本は配慮の行き届いた構成をもっているといわなければならない。

Ⅲ (j) (2)から(m)に及ぶところは、祇王が最後の今様を歌って退邸するまでの経緯である。素材を同じくしながら、南都本は「入道ハ祇王カニ反ノ歌ニモメテ給ハス」とし、源平盛衰記は「あはれ祇王ハ今様は上手かな」「とそほめ給」とするという風に対照的になっている。南都本の方が一貫し

ている感じであるが、源平盛衰記のこの展開は、直前のながながとした今様の解説に関っていると考えられる。源平盛衰記編著者の銜学僻が新解釈を生んだ例である。因みに、僻といえは、源平盛衰記編著者は「時にとりて」の秀句を賞揚する傾きがある。

以上のことから、南都本と源平盛衰記が関係を持つ記事は、「悪行人としての清盛の性格を描き、かつ強調するという」線上にあるものではない。Ⅱ (j) (2) (u)の⑤①にみられるように、源平盛衰記が南都本の表現より踏み出して色付けする部分にこそ「悪行人としての清盛の性格」が、むしろ、見られるのである。

「南都本からの影響」という把握については、Ⅱ (e) (2)などから直接とは判じがたい。又、「情ヲ柳髪ノ」の漢詩などのように素材の姿が源平盛衰記に多く残っているところもある（編著者の学の博さによることも多いが）。現南都本、現源平盛衰記の成立までには、複雑な影響関係が想像されるのである。

(注一)『鹿児島県立短期大学紀要』第二十七号（昭和五十一年十二月）所収

(注二)南都本の章段名によった。

(注三)関口忠男「祇王説話考(一)」(『目白学園女子短大紀要』十一号 所収)

(注四)「南都本の『祇王祇女事』が、『平家物語』に挿入される以前の祇王説話の形をとどめている」という島津忠夫先生の御見解（「祇王説話と平家物語」『国語と国文学』昭和五十一年四月号所収）に同じたい。

「入道自横懷て張臺のうちへ入給ふ仏と名をはつきたれと三
 六通さたらねは迷たるさま成けりさても申けるハこはうつ、な
 らぬ御事かな祇王御前の御言の傳にこそ御目にもかゝる事にて
 候へいかゝさる事侍るへき忘れぬ御事ならは後にこそ召にした
 かひまいらせめと深く痛て候けれとも賞新を棄舊世のさる人の
 くせなれは入道さらにゆるし給はすともかくも我いふにこそし
 たかハの祇王には、かるにこそとて」アリ ②⑧ナシ ②⑨源大夫
 判官を使にて ③⑩ナシ ③⑪日比ハさこそ申侍りしかとも ③⑫な
 れハ今は力及はす ③⑬ナシ ③⑭御 ③⑮出へし ③⑯宣 ③⑰「祇王
 ハ夢うつ、わきかねたり泣々申けるハ」アリ ③⑱よくても有な
 んあしくてもあるへし ③⑲ナシ ④⑰そも ④⑱ナシ ④⑲まかり出
 て侍ら ④⑳遊者ともか ④㉑「門前市をなしてきミつる事よと」
 アリ ④㉒申さん ④㉓心うく侍るへし ④㉔ナシ ④㉕晩を侍侍らは
 や ④㉖申す ④㉗ナシ ④㉘さるけしからぬ人に ④㉙いや／＼とく
 まかり出よ ④㉚「われ出家入道の身なりいまより後ハ一すちに
 佛をあかめ頼むへし仏をあかむる程にては片時も祇王無詮いそ
 き／＼」アリ ④㉛と使しきりにたち ④㉜ナシ

Ⅲ

- (j) ②其後入道押返シ祇王ニ今一返トシヒ給ヘハ祇王涙ニ咽テ物モ申サス良
 ～有テ又加様ニソ歌ヒケル君カアケコシ手枕ノアケテ久ク成ヌカナ何シ
 ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- (m) 二月ノヤトリケンナカラヘスマヌ物故ニウタヒタリケレハ女房達侍共

傳へ聞ツキ様ノ者マテモ皆涙ヲソナカシケル入道ハ祇王カニ反ノ歌ニ
 モメテ給ハストク／＼帰レ構テ常ニ来テ佛ナクサメヨト宣ハ
 校異 ①ナシ ②の給 ③いく度も仰にはとて ④たえ ⑤にけり

⑥隙なくむつれ ⑦なからへもせぬ ⑧「と是を二返そ」アリ
 ⑨たる ⑩ナシ ⑪「入道又打うなつきて此歌は侍従大納言帥
 中納言の娘にあひくして契あさからさりしに何程もなくして別
 つ、歎のあまりに作出てうたひし今やうなりそれにハわれらか
 あけこし手枕とこそあるに一の句を引かへて君かあけこし手枕
 とうたふ事ハ入道か所を思准てうたふにやそれをハ祇王ハいか
 にとしてしりたりけるそかやうの事ハ時にとりて上手ならて叶
 まし」アリ ⑫あはれ祇王ハ今様は上手かな上代も不聞及末代に
 も有難しとそほめ給 ⑬「さて此後ハ不召とも」アリ ⑭ナシ
 ⑮参り ⑯「舞まひて歌うたふて」アリ ⑰「よし／＼つミ深
 く仏なうらみそ」アリ ⑱宣

Ⅰ〇の項は祇王の全盛を妹祇女の「姉カ光リニ」よる時めきで間接的に
 描いたものである。南都本では、祇女でさえ「又ナキ物」であつたとされ
 るなど、この技法が徹底している。

(f) ①は「寵愛のあまり」母閉にまで清盛の恩顧が及んで行く様を描く条
 である。南都本では、閉の「若ク身ノサカリナリシ程」が語られていて、
 閉像が具体化されている。

(h) も「祇々メキケ」ることによって、羨望の的になった祇王の全盛を間

せむ」アリ ⑥ナシ ⑦ナシ ⑧付けるこそおかしけれ

II

(e) ①ワラハモ御目ニカ、リ進セサリシ時ハ諸亭へ推参ヲノミシ侍シニ情アル御詞ニアツカリテ罷出シ時ハウレシク悪様ノ御返事ヲ承テ立出シ折ハ心ウサ限ナカリシ事ソカシ然ニ今佛カ罷出有様只我身ノ上ニノミ覚テ哀ニ侍リ何カハ苦カルヘキ

校異 ①ナシ ②「君に」アリ ③召をかれ ④「童も」アリ ⑤ナシ

⑥こそし候しか ⑦何となく御目にかゝりて見参に入たりしうれしさ ⑧空しく罷出しはつかしさ ⑨ナシ ⑩唯今の⑪「御前」アリ ⑫心の内 ⑬をしはかられて ⑭いと惜く

⑮ナシ

(e) ②ヤ、人ヤアルト宜へハ佐渡判官参タリ只今佛トカヤ神トカヤ名乗ツル遊女ニ見参セヨト祇王カ申スソヨヒ歸テ進セヨト宣へハ

校異 安部資成を以て

(j) ②セメノ和歌ニハヨシサラハ心ノマ、ニツレナカレ憂ニツケテヤ思ヨハルト押返押返三反ウタヒテセメヲフム形ハ人ニ勝テ舞ノ手モ日比秘蔵

(u) セラレタル祇王ニモ今一キワマサリタリケレハ入道感ニ堪スシテセメノ半ニ手ヲアケテ是くト宣へ共耳ニモ聞入スシテセメヲフムニ猶タエスヤ思ハレケン自立テ左右ノ袂ヲトリ我座上ニソオカレケル情ヲ柳髪ノ姿ニ打トハ春ノ思ヤミタレ緑黛桃李ノ粧繪ニ書トモ筆モ及カタフソ覚ユルサシモノ祇王御前モハヤ思忘レ給ニケリ入道人ヤアルくト

宣ハ源大夫判官参リタリ祇王カ方へ宣ヒ遣サレケルハ仰ニテ候へハ佛

ヲハ召帰對面シ候又然ルニウツレハカハル習世ノツネノ事ニ候上モト

ヨリ静海ハ出家入道ニテ候へハ佛ヲ崇ムヘシ祇王ハ此内ヲ急キ罷出ヨ

ト宣ヒケリサレハ人ノ為ニハトテモカクテモ有又ヘカリケルニヤ仏御前

カアシサマノ返事ニ預テ泣々罷出ツル有様ヲ只我古ノ上トノミ思テ能

様ニ見参ニ入タレハ今ハ引返シ我身ノ上ニ成ヌルカナ是モ又先世ノ宿

執ニテコソ有ラメ今更世ヲモ人ヲモ恨ヘキニ非ス但只今日中ニ罷出ル

物ナラハカタヘノ人ノ云ハン事モハツカシ暫ク待タラン夜ニ入テ罷出

ントソ申ケル季貞歸参テ此由申セハ入道以外ニ腹立シテ何条急キ罷出

ヌソトクく罷出スヘキ由重テ宣ケレハ祇王是ヲ聞ウツレハカハルナ

ラヒ世ノ常ノ事ト云ナカラ是程ニ心ウカルヘキ事カトヨ是程ノ事二ナ

リナンウヘハ人目ヲツ、ミ恥ヲ思フヘキニ非スカク情ナキ所二片時居

テモ何カハセントテ見苦シキ物トモ取シタ、メ泣々出ナントシケルカ

校異 ①ナシ ②ナシ ③つられよきなきは人の忘かたきに ④ナシ

⑤舞ければ ⑥「あ、入道か上をこそまはれぬれとて」アリ

⑦ナシ ⑧これへく ⑨ぞ請し給 ⑩「佛は」アリ ⑪是を

きかぬよしに ⑫「猶」アリ ⑬せめけるを ⑭ナシ ⑮入道

座をたち ⑯手 ⑰「て」アリ ⑱引すへたり ⑲「遠くてハ

中く思はぬ心もありつるに近く置て見給へハ」アリ ⑳色

⑳そむれ ㉑ナシ ㉒「安く心を蘭質の手にうつせは秋の露屢

脆し」アリ ㉓「の」アリ ㉔花の形 ㉕かたかりければ ㉖

ことは、その展開も証している（前述）のである。

四

源平盛衰記の「祇王祇女」について、関口氏は次のようにまとめられた。^(注十八)

増補系の延慶本や南都本のそれぞれの祇王説話の内容を適宜、取捨、集成し、その上に盛衰記独特の増補を行なっている箇所が目立つ。特徴としては、延慶本になくて、南都本に加えられた記事が盛衰記に採用、増補されている傾向があり（I (e)・(f)、II (c) (2)・(e) (2)・(j) (2)・(o)・(q) (2)・(r)・(S) (1)・(u)、III (j) (1) (2)、IV (i) (9)）、南都本からの影響が顕著である。

そして、その採用・増補は、悪行人としての清盛の性格を描き、かつ強調するという、先に推量された盛衰記における本説話の収載意図に基づいて行なわれているようであり、本説話の話柄は、延慶本や南都本の祇王説話の線上にあつて、その増補記事からみると、まだ前期の性格を保持してはいるが、その増補の様式、内容からみると、かなり後期になつてからのものと思われる。なお、盛衰記の祇王説話には、語り系諸本の祇王説話からの影響はないようである。しかし、ここで注目すべきことは、盛衰記の本説話にみられる仏教思想の点で、物語的話柄の場合と同様に一見思想的にも後期的性格があらわれているように思われるが、意外なほどに古朴、簡素なたちでの表出（III (r)、N (c) (5) (N (g) (4)）、(i) (9)・(j) (3)・(k) (2)）であり、延慶本・南都本の場合に比して、用語上の潤色がみられる程度で、その仏教思想史上の位相はほぼ同程度であること

である。

右のうち、「延慶本になくて、南都本に加えられた記事が盛衰記に採用・増補されている」にあたる部分を、具体的に検討したい。

I

○祇女モ姉カ光リニヨテ京中其間アリ又ナキ物ニテソ有ケル（南都本）
校異（源平盛衰記） ①「妹の」アリ ②の ③依^{ヨリ} ④洛 ⑤にか、

やけり ⑥ナシ

(f) (1) カ、リシ程ニ或時太政入道祇王ニ向テ抑汝ニ母ト云物ハナキカト問給ヘハ祇王申ケルハワラハカ母ヲハ閉ト申サフラヒテ今ニ持テサフラフ若ク身ノサカリナリシ程ハ其間有シカト今ハ年タケ齡カタフキ侍ヒテ其力ナシ六条堀川ナル所ニカスカナルスマイニテ侍フナリト申ケル入道是ヲキ、給ヒサ程ノ事ヲナト今マテ静海ニシラセサリケルソ不便ノ事コサンナレトテ

校異 ①寵愛のあまり ②ナシ ③親はいかなる者ぞ ④とはれけれ

⑤ナシ ⑥も ⑦「本ハ遊君にて」アリ ⑧けるか ⑨ナシ

⑩ナシ ⑪ナシ ⑫閑^{シツカ} ⑬有様 ⑭侍る ⑮ナシ ⑯申す ⑰

ナシ ⑱扱ハ ⑲いと惜き ⑳や

(h) 祇ト云文字ニハヨシトイフヨミノ有レハニヤトテオノノ寄集テ或ハ

祇一祇二祇壽祇徳ナント名ヲアラタメテ祇々メケリ

校異 ①「実や」アリ ②を ③神^{カミ} ④讀也 ⑤「神は人にもてあそ

ひうやまはる、上神にハ人のおつる事なれば我らもあへものに

「十月ノ比」清盛よりの召しがあるが、母閉と対照的に、祇王はその意図に疑問を懐く。果たして、清盛の目的は「佛御前ノサヒシサヲ慰メ進セン」ということであつた。「我コソ人ヲサモイハント思シニ今更人ニカクイハルヘシトハ思ハサリシヲ」——仏のために芸を演じることが、祇王の自尊心が許さないのである。拒否して、清盛の罰を受ける覚悟が一気に固まつた。しかし、又しても母の閉に「女人ノ習」を説かれ、「我身マテモイカ、セント泣クト」かれて、それも翻意する外なかつたのである。祇王と比べる時、母閉は男性に対して卑屈を極めているが、これは、閉、祇王の母娘（親子）の關係と共に、この時代の姿を写したものに違いないのである。

仏と「閉鎖的な世界」を造っている清盛には、祇王をいたわる心はない。祇王の「歌」は一方で「同じ白拍子」という方向から、その壁にぶつかろうとする——「仏モ昔ハ凡夫ナリ我等モ終ニハ佛ナリ三身仏性具セル身ヲヘタツルノミコソカナシケレ」。又、もう一方で、清盛を失つた悲しさを嘆いて、衷情を訴える——「君カアケコシ手枕ノアケテ久ク成ヌカナ何シニ月ノヤトリケンナカラヘスマヌ物故ニ」。しかし、「入道ハ祇王カ二反ノ歌ニモメテ給」ことはなかつた。

「驢テソノ時身ヲモナケサマヲモ替ヘタリシカハ今カ、ルウキ事ハ見サラマシ」。六条の母閉の下が「カ、ルウキ事」に通じていることも決定的であつた。母を振り捨ててしまわねばならぬ時が来たのである。

この時、祇王がなぜ「淵川ニモ身ヲナケ」ず、「後世菩提ノイトナミ」

に走るのか。それは「後世」が意識される場に「祇王祇女事」が関わっていたことに求める外ないように思う。妹祇女が祇王と行動を共にするのは言うまでもないことであるが、母閉が（「憑」を失つたこともあるが）「然ヘキ善知識」と「対立」を「一挙に止揚」^(注十二)して、行動を共にするのも、それが「後世菩提ノイトナミ」だからである。^(注十三)

「或年十二月二十日余ノ比」突然に仏が訪れる。仏は「イカニヤ祇王御前我ウラメシト思食ツラン」と語る。仏が祇王の恨み（祇王への背信）^(注十四)を意識しだしたのは、前述のように「モエ出ルモ」の歌を見出してからであろうか。清盛の「寵愛甚シク」なるにつれ、祇王が出家へと追いこまれるにつれ、仏は祇王の恨みを意識せざるを得なかつたのであろう。仏は清盛の下をのがれ、出家して祇王と行動を共にすることによって、初めて、「人間を回復し、白拍子としての相互連帯を回復しえたのであつた」^(注十五)。

「善モ悪モ先世ノ所感ナリサレハ今更人ヲ恨進ルニ及ハス」と悟りながら、自分は「スキカネ難キ身ニ成」つて出家したのだという重い意識が祇王にあつたのも確かである。祇王は「世ニ御座シサカヘ給フ」仏の出家を目のあたりにすることによって、そのような敗北感を超越することができたと考えられる。

とり残された清盛の行動は「出家」によって「同じ白拍子」が高揚された今、一転して、完全な戯画となる。南都本の「祇王祇女事」は、ここに象徴されるように、男女の愛と友愛の葛藤を主題にした「白拍子の往生譚」^(注十六)である。これが「念仏の徒」^(注十七)と深いかかわりあいをもっていたに違いない

らしく思える。清盛の愛は、男女の愛と、非倫理的な、美への愛が混交して、奇妙な様相を呈する。

祇王が目のあたりしたのは、その奇妙な愛が、「餘人を容れぬ閉じられた關係」を結んで行く相であつたはずである。しかし、彼女には「人為ニハトモカクテモ有ヌヘカリケルニヤ」と「閉鎖的な世界」への悔恨が過ぎつても、「同じ白拍子」の意識をそれが越えることはないのである。男女

の愛と友愛に翻弄されながら、祇王は「先世ノ宿執」に思い及んでいく。

諦念にたどりついた祇王は「夜ニ入テ罷出」ることを願ひ出る。しかし

清盛の言葉は「トク／＼罷出^退」せよという「情ナ」いものであつた。祇王

は男女の愛の反社会性に向き合わされているのであるが、しかし、この時清盛の愛の非倫理性をも敏感に捉えている。「モエ出ルモカル、モ同シ野邊ノ草何レカ秋ニアハテハツヘキ」には「アタ人」仏に対する、祇王の衝動的な「反感」^(注十)「呪咀」と共に、この愛の質が詠みこまれているように思われるのである。

「八葉ノ車（覚一本では、『平氏のいけどりども』が大路を引き渡される場面)にのみ使われている）ニケシカル牛カケテ中間一人ニ牛飼一人具」して「日中ニ」「宿所ニ歸」つた祇王はひたすらに泣く。

母閉は「縦ス〇ラレ進セタリトテモ女ノ習ナレハ如何セン就中遊者ノ今マテ召置レタリツルコソ不思議ナレ」と言つて、祇王を慰める。閉の言葉は「女」「就中遊者」の一般的な状況を述べて、祇王の「驚」を弱めようと試みたものであろう。しかし、そのような一般的な状況を対置すること

で慰むような、祇王の傷ではない。「ツレナク世ニ交リ有」ことを祇王に拒ませるものは、「恥」の意識と、彼女がどこかで清盛に「選^(注十一)びとられ」ることを期待していた——「遊者」としてだけでなく「女」として清盛に關つていた——ことによるのではないか。或いは、清盛の惨い仕打ちが重なるにつれ、「女」として關つていた面が顕在化してきたというべきだろうか。

「淵川ニモ身ヲナケ世ニナキ者トナラン」という祇王の絶望は、遣る瀬無い彼女の心情として自然である。しかし、母閉にはそれは納得できないのである。閉は「露別ヲ悲テ」と評する。「身ノサカリナリシ程ハ其聞ヘ有シカト今ハ年タケ齡カタフキ侍ヒテ其力ナシ」と白拍子としての人生を経た彼女の目には、祇王の絶望も相対化されるのである（翻意させようという意図的なものがあるにせよ）。閉は「恩」を振り翳して、祇王に翻意をせまる。それを言う閉の心情も複雑なようであるが、己の将来のことを軸に、祇王の将来（翻意後の）についてなど、平凡な樂觀を抱いていたゆえであろう（後に「八条殿ノ御氣色ノナオランスルニコソト心得テ手ヲ合テソ悦ビケル」という場面がある）。

祇王は、こうして、「母ノカナシサニ無力思ヒト、マ」る外なかつたのである。清盛という庇護者を失つて、祇王一家は「昔ノ如ク荒ソ行」。

「祇王カ、ルニ付テモ歎ハ日ニソヘテマサリケル」というのは、一家の大黒柱としての己の能力への絶望にまで、敗北感が深まっていたことを示すのであろうか。

リ妹ハ祇女トテ十六ニナル」と延慶本のそこ「其比都ニ白拍子二人アリ姉ヲハ義王妹ヲハ義女トソ申ケル天下第一ノ女ニテソ有ケル此レハ閉ト云シ白拍子カ娘ナリ」に、叙述のあり方の相違が見られるので、「後の改変」と考えてよいものかどうか、疑問である。^(注四)

三

次に、南都本の「祇王祇女事」について、登場人物の關係及び主題を、その展開にしたがつて（とびとびであるが）検討してみよう。

仏は「抑我都ニ名ヲエテ住ナカラサシモ當時トキメキ給フ太政入道殿ノ見參ニ入サラン事心ウシト思テ」^(注五)「西八条へ推參ス」る。この時の仏には「京中の大評判を背にした氣負いがあるが」、挫折を経験したことのない若者の果敢さもある。

しかし、清盛に「スケナク云レ奉テ世ニ口惜氣ニ思テ袖ヲ兒ニ打當テ罷出」る。仏の心に清盛の「スケナ」さ、「情ナ」さがぬぐいがたく刻み込まれたと思われる。

その光景を「見出シ」た祇王は「佛ヲ召歸テ御對面アレ」と清盛に訴える。この時、祇王は仏に「我古ノ上」を見ていたのであり、「遊者ノ習一人ヲ召置レタレ共參レハ其數御對面アル習ナリ」と、己を清盛と「閉鎖的な世界」^(注六)を造っている女としてでなく、「同じ白拍子」^(注七)として置いたのである。

清盛は祇王に宥められて、仏を呼び返させる。「指モ情ナクコソ仰ラレ

ツレ今夜召ルヘキカ」と不審に思った仏が、祇王のとりなしを知ったのはいつだったのであろうか。——「我西八条ニ召置レ進テ寵愛甚シクシテ年月ヲ経タリツルハ併祇王御前ノ慈悲ノ余リ御情ノイタリ」と告白した仏の文句から、仏を慰めるために祇王が呼び出された時以前であることは明白なのであるが。或いは、祇王退邸後、「モエ出ルモ」の歌を見出してからであろうか。

仏に会い、「人ニ勝」る「形」、「祇王ニモ今一キワマサ」る「舞」に心動かされた清盛は「自立テ左右ノ袂ヲトリ我座上ニ」仏を据える。「サシモノ祇王御前モハヤ思忘れ給」た清盛は、今度は祇王に「此内ヲ急キ罷出ヨ」と命じる。

この時、清盛は祇王に「ウツレハカハル習世ノツネノ事ニ候」^(注八)「静海ハ出家入道ニテ候ヘハ佛ヲ崇ムヘシ」と言い訳をしている。何とも荒荒しい口付きだが、この時の清盛は単なる「強権」^(注九)ではあるまい。仏が「寵愛甚シクシテ」と言っていること、仏に対して祇王を「古ノ座ニハ替テ今一壇サカリタル所ニ置レタ」こと、仏失踪の後「アキレ給ヘル氣色」であったことなどから考えると、むしろ「餘人を容れぬ閉じられた關係」^(注九)を結んでしまった者を見る方がよさそうに思われる（一方的であるという点では「強権」でもある）。「ウツレハカハル習」という表現は、直線的な清盛の心情からすると、そう言うより他なかったのかもしれない。

しかし、この清盛の心変わりには、祇王・仏という個々の人間そのものよりも、「形」「舞」などの美しさにより強くひかれるところに生じたもの

源平盛衰記Ⅱ卷十七「福原京」の末文「太政入道ハ善事にも悪事にも思立ぬれば前後をも不顧人の諫をも用給ふことなし時、ハ物くるハしき心ちも有けるにやか、る遷都までも思立給けり」の後に、「祇王」の章（「祇王祇女」）を「世に白拍子と云者あり」と語り出し、続いて漢家・吾朝の著名な白拍子の例を挙げ、さらに白拍子の由来を語った後に、「その比京中第一のしら拍子ありあねをハ祇王妹をは祇女といふ」として祇王説話が語られていく。従って、(1)型でいうA・B両文は勿論、C文も無く、D文のみが變形されて、本説話の冒頭に登場することになっている。そして、本章の末文に「かやうに何事にも掲焉き人にて思立給ぬれば人の制止にも不拘後悪からんする事をも不顧たま／＼被諫小松殿ハ失給ぬ心に任て振舞給けれハ遷都も思立給けるにこそ」と書き添えている。

二

以上のような収載状態から、外部徴証的にみて、関口氏は、それぞれ次のようなことから推測されている。

南都本ⅡA↓B↓Dと連続する南都本は、C文を欠くために、一見、祇王説話の収載意図が明確さを欠き、それだけ本説話の定着性をも欠いているように思われるが、「吾身榮花」↓「祇王」と続く収載位置からすれば、平家全盛期の状態を語るA・B両文にD文が続いていることは、むしろ自然な展開であり、ここには祇王説話を清盛全盛譚の例

話として語る意図がみられる。南都本はD文が特異な展開をみせているが、これは恐らく延慶本のD文よりは後の改変であろう。

源平盛衰記Ⅱ「祇王」の章（「祇王祇女」）の前後に福原遷都の記事を有し、清盛の「悪行」の極限でもある遷都を断行した、その横暴な性格を強調し、かつ実証する例話として語られている。つまり、遷都の記事とともに、平家滅亡の原因となった「悪行」を描くのであるが、とりわけ、遷都断行という清盛の独裁政治の行なわれた由来を清盛個人の専横な性格にあるとみて、そのような清盛を描く例話、つまり悪行人清盛の性格譚として祇王説話が語られているとみられる。

外部徴証的にみた推測として、いずれも妥当なものと考える。猶お、南都本は、「我身ノ榮花」に始まる段が、「ヨマル・トコソ承ハレ」まで続いて改行になっているので、後の章との関り具合は問題にならないかと思うが、「二代后立給事」と、「ウツレハカハル」人間の関係、権力者である男性の登場、愛欲がからむことなどの面で付く気味がある。

もつとも、「南都本はD文が特異な展開をみせているが、これは恐らく延慶本のD文よりは後の改変であろう」と推測されているところは、南都本の該当部「太政入道朝恩ノアマリニ京中ニ其名ヲエタル白拍子共ヲ集テ西八条ニテ遊覧アリイツレモオトラヌ者共ヲ並居テ入道歌ウタヘト宣ヘハ面々聲々ニ祝ノ歌共ウタヒケリ蓬萊山ニハ千年フル万歳千秋マシマセハ松ノ上ニハ鶴スクヒ岩ノ上ニハ亀アソフト加様ニウタヒタリケレハ入道イト、タエスソ思ハレケル其中ニ祇王祇女トテ兄弟也姉ヲハ祇王トテ十九ニナ

南都本と源平盛衰記

——「祇王祇女事」をめぐって——

橋口晋作

筆者は「『摂政殿落留給事』をめぐって」^(注一)において、南都本と源平盛衰記に類似した捉え方があることに注目した。その折、南都本と源平盛衰記の関係について、いささか思いをめぐらしてみたのであるが、ついに、詳かにし得なかった。そこで、ここに、南都本と源平盛衰記の「祇王祇女事」^(注二)を、先学の御論考を手がかりに考察するにあたり、両本の関係についても思考を深めたいと思う。

一

南都本と源平盛衰記における「祇王祇女事」所載位置及び接続状態（主として前章との）を関口氏の御論考によりながら次に示そう。^(注三)

所載位置

南都本Ⅱ「平家繁昌事」↓「祇王祇女事」↓「二代后立給事」^{付異国先例}

卷一「吾身栄花」↓「祇王」↓「二代后」（覚一本系高野本の表記に

よる）に相当するもの。（1）型とする）

源平盛衰記Ⅱ「福原京」↓「祇王祇女」↓「新都有様」

卷十七にあるもの。（3）型とする。）

接続状態

南都本Ⅱ（1）型の典型的な形態

歌堂舞閣ノ臺魚龍雀馬ノ翫恐クハ帝闕モ仙洞モ此ニハ過シトソミヘ^A
シ^B昔ハ源平兩氏朝家ニ被召仕テ王化ニ不随朝憲ヲ輕ムスル者ニハ
互ニ誠ヲ加シカハ世ノ乱モ無リシニ保元ニ為義切レ平治ニハ義朝被
討テ後ニハ末々ノ源氏少々有シカトモ或ハ被流或被討テ今ハ平家ノ
一類ノミ繁昌メ頭ヲ差出者ナシ如何ナラン末代マテモ底事カ有ムト^(シテ)
目出ソ見ヘタリケル。^C「入道相國加様ニ天下ヲ掌ニ握給フ間世ノ謗
ヲモ不憚人ノ嘲ヲモ不顧不思議ノ事ヲノミシ給ヘリ」^D譬ハ其比都ニ
聞ヘタル白拍子ノ上手義王義女トテヲト、ヒ有土地ト云白拍子ノ娘
也（鎌倉本）

に対して、A↓B↓D（D文中「譬ハ」を欠ぐ）と接続し、C文を欠き、更にD文が變形されて異文になっている。